

3

中島友玄の京遊備忘 其の一

—京都での文人・儒者との交流—

中島 洋一

医療法人洋友会中島病院

表題の「中島友玄の京遊備忘」は中島家四代目の友玄が26才で京都に遊学（天保四年1833年）した時の日記である。「京遊厨費録」は在京中の金銭出納が記されている。

中島家は備前国邑久郡北地村で初代友三（貞享二年～宝暦七年）、二代目玄古（享保元年～安政元年）、三代目宗仙（安永二年～天保十一年）と続き四代目友玄は在村医としての地位を確立した時期であった。父宗仙は享和二年（1801）に28才で京都に遊学し、吉益南涯に古方、その他産科、外科を学んでいて友玄の京都遊学の指標になっている。

友玄の京遊備忘は日本医史学会関西支部機関紙「医譚」復刊88号～91号に抜萃を發表しているが、今回は京都での文人・儒者等の人脈交流について新しい手紙の翻刻を基にして發表したい。

友玄は天保四年26才で上京し吉益北州、緒方順節等に医学を学んだ。友玄は同年2月29日郷里の文人画家浦上春琴を訪れている。また4月10日儒者貫名省吾を訪問している。同年5月16日京遊備忘に「猪飼敬所訪問不遇」と書いてある。4月21日宗仙が友玄に出した書簡に「猪飼より別紙の書状到来いたし候。則論孟考文遣し申し候。熟覧なるべく返書登し候間一覧の上御遣し被成候。右返報に相応の品少々お送り下され候」とある。これにより友玄が猪飼敬所を訪問した目的が判明するのであるが、この度猪飼敬所より宗仙宛の書簡の翻刻を得た。それによれば、「敬所の門人中村中書が拙書「論孟考文」を上木（出版）した。中村中書は宗仙が京都で敬所の塾で共に学んだ間柄なので昔年の事を思い出される事と思い一部進呈する」とある。ここの書簡の翻刻文を掲載する。

一筆致啓上候。爾来御疎濶ノ相過候。先以春暖之節、愈ノ御勇健御入可被成、珍重奉存候。ノ拙方乍老衰、依旧到教授候。ノ乍慮外、御省念可被下候。一昨々年ノ御門人ニ托し御書状被下候処、ノ其人拙塾門生ニ医家にて出合、ノ渡シ被申候。拙家へ被来候ハ、御答ノ可申入存候。其御門人不来ニ而、帰国もノ存不申、御答不申入候。今般、美濃ノ門人丸山道男、同柳沢兄弟ノ医学修行ニ西遊致し候。篤志之ノ者ニ候ハ、貴家へ御尋可申候。医道ノ心得ニ相成候事、御示可被下候。右ノ得貴意度如此御座候。不具頓首三月三日 猪飼敬所

再白

先年京師御遊学之時、紹介致し候ノ吉川中所、只今ハ中村中書と改名致し、ノ六、七年前より、信州高遠へ儒医兼学にてノ被召抱、藩中師範致し候。此人去冬ノ拙著論孟考文上木、御旧識之儀、ノ昔年之事、御思出し可被成と存候故、ノ一部致進上候。已上

（註・本翻刻文は町泉寿郎氏によるものである）

父宗仙以来の儒学者猪飼敬所との交流が明確となった。

友玄は岡山で鴨方藩医武井養貞に天保元年（1830年）より譜代弟子願いをして医学を学んでおり、この度の上洛は現代で云えば地方大学を卒業しさらに京都の大学院に就学したに等しい。医学に関しても当初は古方の吉益北州、産科の緒方順節の塾のみであったが、友人・知人等の紹介により小石元瑞、藤林泰祐、清水大学、高階清介など多くの医学者に入門して学んでいる。前述の文人画家、儒学者との交流も含め幅広い学問研鑽のあとが偲ばれて興味深い。